

Title	スペイン語se統一仮説に向けて
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 42 p.1-p.14
Issue Date	1978-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80708
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「スペイン語se統一仮説に向けて」

出 口 厚 実

A Unified SE Hypothesis in Spanish

Atsumi DEGUCHI

This paper discusses the various types of “se” sentences in Spanish and proposes an integrated treatment of true reflexives and pseudo-reflexives. The arguments presented by Hara (1976) and Terasaki (1976) against the transformational one-source analysis of “se” will be examined and rejected in favor of a unificatory hypothesis of “se”’s which explains the syntax and semantics of a wider range of Spanish ‘surface’ reflexives.

We attempt to show that the so-called divisions between ‘impersonal’ and ‘reflexive-passive’ or between ‘pseudo-reflexive’ and ‘impersonal’ never exist on semantic grounds. Their bifurcation on the surface syntax does not reflect the semantic distinctness of “se” itself, but merely the environment in which it would appear under different situations.

It is claimed that a unitary “se” should be introduced into structures where the subject or object position is syntactically blank. Blanking of a grammatical relation occurs either when one of the participants is of no importance, indeterminate, or completely null from the point of view of verbal semantics, or it originates from the ban on the repetition of the identical NP’s in true reflexive constructions.

スペイン語の再帰文とseに関する論争は相変わらず活潑である。議論が出尽したとは未だとうてい言えないが、“謎のse” 解明へ向って少しずつ前進していると信じたい。特に鋭く意見が対立するのは、文(1)～(3)に含まれるseを(4)のseと同じ仲間の再帰代名詞と認めるか否か、をめぐってである。

(1) Se edifican muchas casas en este barrio.

(2) Se respeta a los ancianos.

(3) Aquí se vive bastante bien.

(4) María se lavó.

出口 (1972, 1973, 1975) では上例に類する各文及びいくつかの他のタイプの文はいずれも再帰形seを持ち、共通の統語的プロセスで説明されるべきだと主張した。どのような型式の文を自己再帰

文(4)と関連づけるか、その範囲と形式的手順には各論者の間に不一致があることを認めつつ、この主張を‘se統一仮説’と呼ぶことにする。本稿の前半は前掲の拙論で触れなかった、または以降に発表された‘se統一説’に対する批判、とりわけ原(1976)、寺崎(1976)に焦点を合わせ、それらがse再帰説の論拠を弱めるものではないことを明らかにする。後半では各種のseの生起をより一元的に説明する新たな原理の追求を試みる。

I

1) se統一仮説は基本的な2つの主張を含んでいる。第1に(1)~(4)に出現するすべてのseは統語的に極めて類似するゆえ、同一統語単位、i.e. 再帰代名詞(接語形)【以下RPと略す】であると認める。第2は、seとして外在化する様々な(?)意味は互に独立した別々の4単位あるいは3単位ではなく、それぞれが深い所で意味上の接点を保ちながら形態・統語形式を共有しているとする見方である。第1の論点の中で、seがシンタクシスの面での同一特性をもつこと、すなわちme, te, loなどと同様のcliticであることに正面から反論する文法家はいない。ただ、(1)~(3)のseを‘再帰’と見ることを断固拒否する人々がある。‘再帰’という呼び方に誤解を招く恐れがあるならば、特殊接語詞、動助辞とか新術語を考案してもよいだろう。しかしどの名称が最もふさわしいかは本質的な問題ではない。要は、これらのseすべてを同じ名前で呼ぶことによりその統語・意味論上のまとまりを重視したいのである。

原は(3)の文型式で、“seは主語である(1975:96)”, “つまり意味部門では「主格」に「人は」, また統語部門では「主語」としてseを認める(1976:60)”[下点:出口]と明言するが、その根拠は何だろうか。現代スペイン語において主語として機能し得るのはNPであり、seは浅い統語構造においてNPでないことは殆ど疑念の余地がない。その証拠は、特にunoとseの統語的差異を論じる過程でRoldán(1971:26-7), Contreras(1974:第1章) etc.によって最も包括的に示されているので、ここで改めて繰り返す必要はないと思う。それにも拘わらずseを文(法)主語とみなす主張がしばしばなされて来たのは、^(註1)深層のAgent(行為主体)と表層の文法主語の概念が正確に把握されていないためではあるまいか。se再帰説に異議を唱える人々は殆ど各種のseの統語特性上の緊密性を見過ぐすか、^(註2)過小評価する傾向がある。seの統語的統一性を認めることが第2の論点に不可欠の土台であることは言うまでもない。

2) se統一仮説は文(1)~(4)がすべて同種同型の文構成をもつと分析しているのではない。各々の文に含まれるseの意味の親近性、なかんずく(1)~(3)のseの同一性を評価すべきことを強調する。これに対立する見解は、この文法的小辞が担う機能が到底融合できぬ程かけ離れているゆえ、それぞれ別個の統語単位であるという説である。^(註3)意味とシンタクシスのレベルを峻別しないこの短絡的論法が支持されないのは当然である。しかし、逆に、統語的に等しいあるいは近い価値をもつものは意味的にすべて関連づけなければならぬ理由もない。ただ、同一音形、同じ統語価を示す小辞である

故、何らかの意味上の共通項が関与しているのではないかという可能性を探求することは重要である。

原 (1976: 60) は例文(5)が「再帰受身」または「汎人称」両様に解し得る例としては不適當である。

(5) Se les recibirá bien a tus hijas.

り「汎人称」としか解し得ないと指適する。(5)の翻訳が“君の娘さんは歓迎されるだろう”と日本語では受身に訳される事実の他、實際上、「再帰受身」なのか「汎人称」なのか判別できない(6)

(6) Se dice que es una santa.

のような文の存在を認めながら、原 (1976) は2つのseの区別に固執する。(5)においてtus hijasが主語とならず、(1)のmuchas casasが主語とみなされるのは、これらの名詞句の統語的性質に起因するのであって [cf. 後出 I § 3, II § 4], この差があるから「汎人称のse」「受身のse」が常に対立する、あるいは2つのseが対立するからこの差が現れると考えるのは妥当でないとするのが小論の立場である。言い換えれば、不定人称(汎人称)・再帰受動は別個の意味範疇ではなく、むしろ根底において不離一体だから同じ形式が用いられて当然だと考えるのである。意味機能そのものを純粹な形で直視する姿勢を捨て、無理に2種類のseを設定するとすれば、それはseに付随する表層の統語形状の下位区分であって、seの意味分類と言えないだろう。

3) 寺崎 (1976: 181) は(2)の類型に対する出口 (1975) の示唆はad hocであり、他のse統一仮説もこの非人称構文を十分に納得いくよう説明し得ず、従ってこの説は疑わしいと結論する。前稿で筆者が示唆した中間主語及び(表層)主語の区別を更にはっきりさせるため、ここで前者を主語 (Subject), 後者を主格 (Nominative) と呼び換えることにする。同様に直接目的語 (Direct Object) と対格 (Accusative) を区別する。(1)のmuchas casas, (2)のlos ancianos両者は基底に不定主語があったためにObject Substitutionにより共に主語化^(註4)してseが現われる。ただlos ancianosはCase Markingが対格に指定され直接目的語に再分析されなければならない点が(1)と異なる。この対格指定と再解釈が例を見ない変則的現象であり認められないというのが寺崎の批判の主旨であろうと思う。しかし(2)los ancianos, (5)las hijasが主格になれないのは全く突発的な異常性でなく、出口 (1975: 77) で提案した表層主語(=主格)候補の条件に照した相対的な不定性の低さで一般的に説明がつく。また有生名詞がNominativeになると、自己再帰・相互の意味の両義性が起こり得るという表層構造のperceptual strategiesが主格指定に抵抗を示す。恐らくこの二つが共謀として働き、Subject → Nominativeの自動的格指定を妨げていると考えられる。この場合、仮に定性の高い通常の主語が選択されたならば、los ancianosは当然Accusativeになるはずであるから、これに準じて対格に落ちつくのが順当であり、さらにこの対格(主語)が基底の文法関係に干渉されて直接目的語にre-analysisされるのも異常なことではない。むしろ、los ancianosの対格指定をse自体の内的特性に帰し、「非人称のse」だから対格になるという主張の方にad hocさと、循環論法を見るのは筆者だけであろうか。いずれにせよ、los ancianosが直接目的語であるとどれほど力説しても、そこからseが主語であるとか、seの機能が(1)の場合と異なるという帰結は

生まれて来ないことを銘記すべきである。

4) 寺崎 (1975: 180, 171-2) は文(3)のように動詞vivirと組むse文に出口 (1975) がzero objectを仮定するとし、それを意味的にも根拠がないと批判している。まず最初に筆者はse viveにこのような取扱いをしていないことを断わっておく必要がある。(3)のタイプの文のseを ϕ ObjectiveのCopyingで導くSchroten (1972) の説に筆者も反対であることは言うまでもない。拙稿 (1975) であげた例文は(7)であり, bailar は un vals, un tango, una danza japonesa, etc. 明らかに直

(7) Se baila toda la noche.

接目的語を取り得る。ただいかなる踊りか特定しない場合, その直接目的語が表面に現われないだけで, 意味上から, そのような非定一般名詞を基底構造に仮定することに根拠がある。beber, cantar, comer, fumar, leer, pescar, etc.の動詞も同様に考えられる。もしこれらの動詞に対して, 何らかの目的語が深層に仮定されないと, 例えばbeberは一方でmorir, dormir, llegarと同じようなone-place verbとして機能し, 他方でtomar, matar, quererの如きtwo-place verbとして働く別種の意味機能をもつ二個のhomonymから成るという望ましくない分割を行なうことになる。すなわち目的語が現われないことと意味上自動詞 (one-place verb) であることは別の問題である。^[注7]

Se受動文なるものが存在しないという仮説の第1の論拠として, Suñer (1973: 13) は(8)(9)の2文が同義でないことを指適し, 寺崎 (1976) もこれを支持している。これは至極当然のことであり,

(8) Se canta una canción en la iglesia.

(9) Se canta en la iglesia.

Babcock (1970: 46) の示唆したcognate object削除に対する反証にはなるかも知れないが, 音形的に実現されない不完全指定の目的語の仮定を否定するevidenceでも何でもない。むしろこの考え方に立つ方が上文の意味相異をSuñerの提唱する意味解釈法よりたぶん直接的に確実にとらえられるはずである。またse vive, se está, etc.と違ってse baila, se cantaなどが直接目的語を基底に含むことは統語上も証拠があり, qué疑問文の成否(10)~(13)で確認できる。

(10) ¿Qué se canta en la iglesia?

(11) ¿Qué se bailaba en el salón?

(12)*¿Qué se vive bastante bien?

(13)*¿Qué se está bien en el comedor?

se統一仮説は(3)(14)などの不定人称文を説明するのに成功していないと寺崎 (1976) は指適する。出口 (1975) はこれらの文を半主語化から導くことに問題があると述べ, そこでは明確な解決を示さなかった。確かに一瞥したところ, (1)(2)など基底に明白な目的語を持つ構造と, それを欠く(3) (14)

(3) Se vive bastante bien aquí.

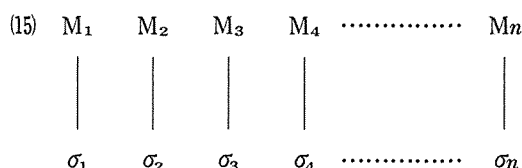
(14) Se está bien en el comedor.

に例示される文タイプの間には断層が存在するようにも見える。しかし本稿の後半で明らかにする

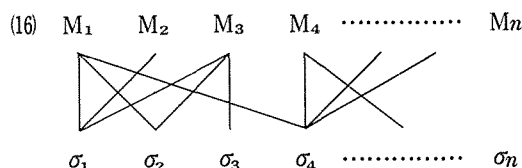
ように両構文の根底には本質的に同じ意味内容があり、^[注8](4)と共にR Pをもって現われる理由があるという分析を変更する必要はない。

5) 従来、この種のアプローチに対してなされる批判・攻撃のパタンには小論の文法観と根本的に相反する所が見られるようなので、ここであるべく一般化した形で考え方のくい違いが生じる所以を明確にして置きたい。

自然言語における意味機能と統語形式^[注9]の関係は決して(15)図のような一対一の整然とした一段階の



対応を示さないことを我々は経験的に知っている。むしろ(16)のごとく、連線は重発・交差・重着し互に錯綜しているに違いない。特に留意しなければならないのは、意味の単位 M_1, M_2, M_3, \dots は統



語論上の単位ほど客観的な基準でもって確定することが困難であること、及びMと σ との結びつきがいかに複雑であろうと、完全に恣意的でなければならない理由はない点である。 M_1, M_2, M_3 が互に無縁な単位であつても同一統語形式 σ_1 をもつことは可能である。しかし $M_1, M_2, M_3, \dots, M_n$ の分割が不動の性質のものでないならば、同一形式で実現される M_1, M_2, M_3 の関連性を疑ってみることは有意味だと思われる。このような試みをありもしないgeneralizationを求めるものと非難するために2つの論法が用いられる。 M_1 と σ_1 が結びつけられたとしても M_1 は σ_2, σ_4 とも繋がるからその関係は疑わしいというのである。例えばスペイン語では自発の意味が再帰形をとって現われることが多いが、これを $M_1 - \sigma_1$ の関係として捉えたと仮定しよう。ところがcrecer, caer, brillar, lucir, etc. は非再帰形で実現するから $M_1 - \sigma_2$ が存在する。従つて $M_1 - \sigma_1$ の関係は無効だと反駁がなされる。また自己再帰と再帰受動をそれぞれ M_1, M_2 に当て、それらと σ_1 との関連から M_1, M_2 の類似性を指適する場合、同じ σ_1 で現われる M_3 (非人称)と σ_1 がつながらなければ〔実際に結びつけられるのだが〕、 $M_1, M_2 - \sigma_1$ を証明したことにならないという議論もある。もしseを一元的にすべての場合をもれなく説明できなければ、seはすべて独立した単位であるという結論がどうして生まれるのだろうか。これらはあたかも(15)のように M_1, M_2, \dots, M_n に $\sigma_1, \sigma_2, \dots, \sigma_n$ が厳密なbiuniquenessの原理に基いた対応をなす言語のシステムを予想して、そのM- σ 間の結合を立証していないと非難する

ようなものである。

M_x, M_y, M_z が本当に互に無関係な意味単位か、 $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$ が互に独立した統語単位かを十分に確めないで、それらが異なる意味機能であるから統語的に異なる単位であると主張するように思われる原(1976)や寺崎(1976)の分析には二重の意味において賛意を表すことができない。第一に M_x, M_y, M_z が異なることを証明したと考えられないことであるが、たとえ、これら $[M_x, M_y, M_z]$ を再帰・再帰受身・汎人称にたとえて]がa prioriに異なる意味機能をもつと仮定しても、それが別々の統語単位に分割されなければならぬ理由は全くない。同一統語形式、i. e. 再帰代名詞と実現と認めることでどんな支障が生じるのか筆者は理解に苦しむ。浅層シンタクシスからは $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$ が基本的に、同一物であることを示す明白な証拠があるからなおさらである。

寺崎(1976)の結論は次のとおりである。“その形態的な同一性や統語的な共通性にもかかわらず、再帰文のseは異なる機能を持ち、異なる原理に基礎をおいていくつかのタイプの文に実現している形式と考える。(p.183)” 引用の前半はseが統語的に一つのものであることを認めているとも読まれるが、‘異なる原理’とは一体何なのか全く述べていない。基底のレベルと表面のレベルの分離や変形を認めないと推測する彼の立場からすれば、この原理は統語的手段そのものとししか理解できないから、結局『統語的に同じ(若しくは類似している)が異なる機能をもつ故、やはり統語的に違う』という分析になるのだろうか。しかしそれ以前に‘異なる機能’があるかどうか再確認することを忘れてはならない。小論は拙文(1975)に向けられた批判に応えるのが主眼なので、分類主義に立つ寺崎の両論文(1974, 1976)の内容を全面的に検討することはここでは差し控えるが、一つだけ疑問を表明しておく。寺崎は文(1)(2)のseをそれぞれ「非能動のse」と「非人称のse」として区別するが、これは本当にseの機能の差、あるいはseの意味の違いだろうか。筆者の答えは否である。両構文の違いはse以外の参与成分の統語・意味的特徴によると考える。従って、統語的に等しく、機能上も本質的に異なるものを別物だとは言えないのである。

他動詞・再帰・再帰受身・非人称・ser-do受身・自動詞などきちんと区割された文型式を定立された不変(且つ普遍の?)の前提として文法分析へスタートすると我々は各々の構文のより深いところ、またそれらの境界線上に隠れているかも知れぬ因子を見失いやすい。一見多様な意味がなぜ同一の統語的手段や形態素に収束するのかを探究することがどうして言語学上の疑似問題(寺崎1976:179)やフォーマリズムの遊戯にすぎないのだろうか。このような問いかけを忘れた文法研究からは言語の諸事象に秘め根源的なものに対する洞察は生まれず、虚構のモデル(15)が実在するが如く統語形式に一つづつラベルを貼る分類作業に終始するであろう。

6) se再帰説はまた解釈意味論からの挑戦を受けている。ここでは紙面の都合で反論を展開する余地がないのでSuñer(1973, 1976)のみを簡単に取り上げる。彼女は単一語彙項目としてのseを認め、これをbaseで生成するが、 $[+3rd\ pers][\pm plural]$ 以外の意味は各文脈によって $[+ impersonal][+ pseudo-reflexive][+ spontaneous]$ などに解釈される。この派の人々が唱える“変

形のパワーを制限する”スローガンを実践した代償として、基底部門を殆ど表層構造製造部門と呼ぶべき程、‘強力’にして且つ別の装置で濾過しなければならない無数の‘非構造’を作り出した後、“何でも解釈できるような”解釈規則を設けた結果、出て来たものは伝統文法が古くから行っていた『seを××種類に分類解釈する』と少しも変わらない代物である。様々に解釈できることは分かっているのである。我々が関心を懐くのは非人称とか疑似再帰とかいう独立の意味概念があるのか、もしあるとすればその本質は何かという点であるが、この理論は一切これに答えない。言語は色々に解釈できるのが言語たる本質であると言って片付けてしまえばそれでいいのだろうか。seにこのような多くの解釈を可能にし、他の解釈を許さない原理を発見するためには、意味をsyntaxに編成する生成のメカニズムを解明しなければならないだろう。

II

1) 文(17[=(4)])は(18)のような構造に再帰化(Reflexivization)が働き2番目のMaríaに再帰代名詞

(17) María se lavó.

(18) *María lavó (a) María.

seが交替して生まれたと一般に考えられている。即ちRPは同一指示の2つのclause mate名詞句の一方の代わりに出現すると言われる。多くの言語における再帰化の特色は同一名詞句の重出が避けられ、何らかの形態素がその代理をmarkする点であるが、Mohawk語のように表層目的語を^(注10)♂化する言語が存在する一方、同じNPを繰り返して表現する言語の存在は現在まで知られていない。^(注11)そこで筆者は再帰化過程を、繰り返されたNPの除去と代替物の挿入に2分し、前者を再帰化の普遍的部分であり、本質としてとらえる。再帰化の適用域は個別言語差が見られるものの、重出を禁止している範囲として一般化できる。そこから(18)の第2のMaríaが語彙項目として出現できないため、直接目的語が空白になった構造(17a)を認め、これがRPのseを導入し(17)が生じる原因となったのではないかと推定する。この視点はIでみた各種のse構文を(17)に結びつける重要な鍵であるこ

(17a) María lava _____.

とを以下に見て行く。

2) 文(19[=(1)])の意味構造には不定の行為者が含まれているが、数・人称を明示せず非特定の人間

(19) Se edifican muchas casas en este barrio.

を表わす語彙項目はスペイン語に存在しないため、その派生途上に統語主語が空白のままの(19a)のような構造を仮定することができる。伝統的に“不定人称”“無人称”“非人称”などと称されて

(19a) _____ edifica muchas casas en este barrio.

いるものの中身は多様であるが、特定の語彙で表わせないあるいは表わしたくない対象を含んでいる。極端な例としては明らかに1人称単数yoに言及するタイプの文(20)すら見られる。しかし(20)(21)(22)各文に共通するのは、それぞれの場合にふさわしいlexical itemを選択できず、(20a)(21a)(22a)

(20) ¡ Se agradece! (Moliner 1967: II, 1118)

のごとき主語空欄の構造を介してseが生み出されたという点である。心理動詞 alegrar, sorprender

(20a) _____ agradece.

(21) Aquí se vive bastante bien.

a. Aquí _____ vive bastante bien.

(22) Se respeta a los ancianos.

a. _____ respeta (a) los ancianos.

は他動詞で使役の意味を持つ。しかしこのような感情を引き起こす原因要素が認定不能な場合、あるいは弱く感じられる時、使役主語の座はblankとなり、Experiencerが直接目的語の位置を占める結果、(23a) (24a)からそれぞれ(23)(24)が導かれる。

(23) Lucas se sorprendió.

a. _____ sorprendió (a) Lucas.

(24) Me alegro.

a. _____ alegra (a) mi.

(25)(26)(27)に見られるromperse, evaporarse, enfriarseなど、いわゆる自発の意味の再帰動詞に

(25) Los vasos se rompieron.

(26) El agua se evaporó.

(27) El té se ha enfriado ya.

対しても抽象的な無生の主語がその不定性の故に語彙実現を持たないと解釈できる。場合によっては、文(25)のように人間によって“こわされた”意の両義性があることも周知の事実である。いずれの場合も、次の中間構造を仮定できよう。

(25a) _____ rompe los vasos.

(26a) _____ evaporó el agua.

(27a) _____ ha enfriado ya el té.

RPを伴うlevantarse, sentarse, acercarse, etc. 運動の動詞には、通常、使役性は含まれず、ただ動作が自己内で完結することを示している。従って文(28)は(28a)と関係づけられるかも知れない。^[注12]

(28) Juan se levantó temprano.

(28a) _____ levantó (a) Juan temprano.

この構造には全く外的Agentは存在しないが、語彙の性質上、行為者主語が要求されるので、blankが生じてしまったと考えられる。一方、限定されたcontextの中でこの動詞はself-causativeの読みを持ち得る。^[注13]その時は(28b)を基底に持つであろう。

(28b) Juan levantó (a) Juan.

3) 前節で見た再帰文(19)~(28)に共通しているのは、各動詞語彙が統語的枠組として要求する主語を

埋めるべきNPが全く存在しないか、論理的に存在するはずでも話者や聞き手の意識には無い^(註14)か、あるいは意図的に潜行させ、推理解釈を期待するなどの理由で、主語が空席のままになる構造が生じた点である。ここで直接目的語にやはり空白を持つ(17a)との類似に注目しなければならない。つまり、主語・直接目的語の一方が適切な語彙項目で満たされない時にRPの出現が起こることがわかる。再帰文は(29)にみられるように間接目的語に関しても生じるので、正確に言えば動詞の意味に参与す

(29) María se lavó las manos.

る成分(participant)の一つが語彙挿入を妨げられblankの状態になることがse出現の要件とみなせる。

しかし、自己再帰文を他の再帰文に結びつかせるもっと強い動機づけは意味そのものの中にある。自己再帰文では主語と目的語が同一で一人の参加者が二役の統語的役割を演じるため、実質一人減の役者で以って動詞の意味の場が成り立ち、参加者が一人消えたことを示している。すなわち、動詞の意味を構成するために必要な参与成分の一つが完全に欠如するか、あるいはその重要性が著しく減じる(19～28文の意味構造と類似する。これらの文で主語のもつ意味の不定性、換言すると意味の濃淡や具体性に差があり、比較的参加者の影が強く感じられる(19a)から全く存在しない(28a)まで連続的であるが、統語的には一律に主語のblankとして扱われ、(17a)との同等性が生まれる。以上の考察から、se統一仮説が記述の簡潔のみを目ざした“便乗主義(Free-Ride Principle)”の悪例であるとみなすSuñer(1975)の非難は的外れであることがわかる。

再帰化と一般anaphoraの違いにも留意する必要があるだろう。後者も同一NPの繰り返しを避け、表層でそれを ϕ 化することがあるが、参与成分は決して意味の場から消えるのではなく、従って主語ないし目的語のblankingを惹起しない点で前者と性質を異にする。Anaphoraによる削除は文脈のpragmaticな諸条件に左右される、極めて表層的な現象である。

4) ところで(30)(31)に類した、目的語を表面に持たない他動詞文は珍しくない。これらの動詞は不定

(30) Voy a comer.

(31) Va a pescar al río.

意味の直接目的語を潜在させているのではなく、むしろ復元容易な一定意味の目的語を表層化しなかったと考える。それゆえ(30)は(30a)でなく統語的dummyを支配する(30b)を派生構造に持つ。

(30b)にはRPは挿入されず、直接目的語 Δ はquantifyされない限りゼロとして実現する。 Δ を許す

(30a) *Voy a comer _____.

(30b) Voy a comer Δ .

可否かは動詞の意味を手掛りにして、表層に何の証跡も残さない目的語がどの程度復元可能かを判断して、現実の使用場面の諸要素を考慮しながら決定される。同様な理由で、主に気象現象に用いられる単人称動詞v. gr. lloverは統語的に無主語ではなく Δ を主語にすると仮定されるので、*se llueveが生じない^(註15)。

(19)でmuchas casasが主格に指定され、(22)ではlos ancianosが明らかに対格である事実は、拙稿(1975)で示唆した通りseを生起させる一般的条件と切り離して考えられるべきで、両文のse自身の内部差異として説明できない。直接目的語であったものが主格に立つ可否かは、主語に選ばれた参与成分の定性、人間性、目的語そのものが持つ定性及び活動性との相関関係から決まる。主語の意味が希薄であればあるほど、又直接目的語の意味が希薄であればあるほど、目的語は主語(主格)へ転進しやすい。主語が空席になった場合、文中の他の有力候補がその座を占めるのが普通である。しかし(22)でlos ancianosを主語＝主格として避けるのは文(32)の自己再帰及び相互的解釈との衝突を

(32) Los ancianos se respetan.

配慮したperceptual strategiesが働くためであろう。動詞が〔+human〕主語を選択するこの種の構文では同じ特徴をもつ直接目的語を主語＝主格に昇進させると、当然構造的な多義性は増し望ましくない結果が生じるからである。他方、元々の直接目的語の活動性が低くければ、動詞がたとえAgentを許す種類のものであっても、主格となった旧目的語が行為者と解釈される恐れはない故、(19)のような文が可能となる。

5) 自己再帰文(17)とⅡ 2) で取り上げた各種の再帰文の根底に潜むと思われる内実を探ることにより、“各々のseが自律独立の単位でありRPとして現われるのは(史的)偶然の所産である”という説が疑わしいことを示した。一つの参与成分が語彙によって占められるべきにもかかわらず空白になっている構造に直接RPを導入する規則を設けて、これらの構造を統一的に生成できるであろう。^(註19) 実際、共時言語事実を特徴づけるには上のルールが現代スペイン語に働いていると述べることで充分であるかも知れない。しかし、indeterminate subjectを含む意味構造を再築する手掛りとして表層に姿を見せる形態素がなぜ他の接語形目的格代名詞と同じ統語的特性を持つのかを明らかにしていない。^(註20) 自己再帰文(17)に現われるseが他の目的格代名詞と同様な特色を有するのは不思議でない。隠されているNPは元来対格に指定されるはずだったからである。ところが(20)(21)(22)などで空席のNPを保障するtracerならば、目的格でなければならぬ理由はない。これはどのように説明されるべきだろうか。史的事実を別にしても、このことは(17)が他の種類の再帰文の原型であることを示唆している。再帰受動文(19)、不定人称文(20)～(22)、再帰自動詞文(23)～(28)にことごとく目的格形態素が出現するのは、これらの文型の大部分が目的語を原位置に残したまま主語へのCopyingを受けて同一NPが文中に繰り返されるのが原因である。このObject Copyingは機能上、一種のfocusing ruleである。主語に立つ内容の弱体性のために普通はfocusを受けない要素が二次焦点化の対象になり、主語にもその複製があらわれ、結局(17a)のような構造を経て目的格の代名詞を得たのではないと思われる。(25)を例にとれば、(25a)からObject Substitutionで(33a)に変えられ、再帰化を受けb.になる。そし

(25a) _____ rompe los vasos.

(33) a. Los vasos rompen los vasos.

b. Los vasos rompen _____.

c. Los vasos se rompen.

で最終的に(33c)=(25)が生まれる。ところで(33a)のように直接目的語が完全に主語へ移り切らず、言わば半昇進が起きるのはなぜだろうか。それは全く外的agentと無関係に実現するかのように認識される事象と、たとえばかすかにせよ行為者・外因の存在が意識され被動性のある現象との区別を保持しようとするためではないか。すなわち、(25a)の主語は統語的にblankであっても、その意味内容は決して白紙でないから直接目的語を完全に受け容れることに抵抗を示し、その名詞句があたかも2分割されたように主語・目的語の両方に現われる。romperは非再帰形でも使われるが〔34〕、この文には(33c)に認められる不定の行為者や動因を求めるのは無理である。

(34) Las olas rompían.

従って(34)は(25a)に類する白紙主語を含む構造からではなく、one-place verbのromperから生じたのである。これに似た対立はtocar, abrirなどにも見られ、seをとるか否かの分岐点はかなりデリケートな語彙的特異性に左右されるとは言え、動詞の意味が一つの参与成分で十分か、2参与成分を要求するかが重要な因子であることは確かであろう。

さて(25a)→(33c)のプロセスが定着し、(17a)と(33b)の同型性が確立すると(33a,b)の段階は短絡し、ただ“何でもよい”一つのblankの存在がRPの挿入を引き起こすようルール的一般化が行なわれ、その結果、完全な自動詞で直接目的語を取り得ない文(14)にもseが現われることとなった。

最後に文(20)~(22)における動詞の3人称単数形を説明しなければならないだろう。これらは動詞が呼応すべき主格のNPを欠く。対格に一致するタイプの文(35)は一般に許容されない^(註21)。また(20)(21)では

(35) ?*Se respetan a los ancianos.

いかなるNPも存在しない。Goldin (1968: 15), Suñer (1973: 25) は深層構造に主語がなければ自動的に動詞を3人称単数に指定する規則を仮定する。彼らの考えでは(20)~(22)に表層主語がないのはllover, nevarが無主語であるのと同じである。筆者は天候動詞と非人称文の主格を統語的に等しいとみなす立場から、se文にも動詞の3・単形を導くplace-holderとしての主格proを認めるべきではないかと考える。これは気象現象の動詞に付随する△主語と区別される。後者は比喩的意味でNP主語を許すのに対し、前者はそれが不可能である。また不定詞構文の形成を一般的にとらえる上でも、上例の各文を有主語とみなし、統語的に主語を消失した文、主語が他の位置に転出した文などの無主語構造と対立させたい。

6) スペイン語再帰文の検討を通じて我々が学び得る重要な点は、他動文の一種である自己再帰文、受動文、自発動詞文、不定人称文が意味的にも統語的にも有機的な一つの連環を成しているということである。スペイン語を含むロマンス語のみならず、ロシア語・ポーランド語・チェコ語・セルボ・クロアチア語etc.のスラブ語にも、スウェーデン語・ノルウェー語・デンマーク語等のスカンディナヴィア諸語にも自己再帰文の機能的拡散が存在する事実も、これが同音異義の事例の多発でないことを確信させる。Langacker & Munro (1975: 801) によればUto-azteca語族に属すNorthern Paiute, Papago, Aztec各語でも受動的意味にRPが利用される。

自己再帰文においては表面に主語・目的語の2構成素を保ちながらcoreferenceの故に、実質上の参与成分が一つ減少し動詞の意味世界が外部の作用者なしで完結することを示す。文の意味構造で参与成分が弱体なため殆ど外力として働かず他の参与成分に焦点が当てられる時、一参与成分の減少として感じられ、自己再帰文との類似は明らかである。統語的に二項を持ちながら実際は一つの成分が動詞に参与する主語・目的語兼務の構文をモデルとして、統語上 n 項を支配する動詞に、 $(n-1)$ 個の成分が参与する状況を表現するのに最もふさわしい手段としてRPが選ばれるのは不思議でない。

スペイン語のRPはここに検討したタイプの文以外にも現われる。それらに対して本稿のアプローチがそのまま適用できるかどうか、かなり疑問である。しかし、両者を切り離して全く無関係に扱うべきだと結論するのは尚早で、今後の解明に待つところが大きい。

(July 30th, 1977)

[注]

1. Oca(1914)を始めとする多くの伝統文法家のみならず、Foster(1970), Perlmutter (1971), Hadlich (1971) などの変形文法の枠組での分析にも見られる。
2. Suñer(1973, 1976)はむしろ例外である。
3. 例えば前置詞deは実に多種多様な意味に対応する。しかし統語的に一つの前置詞であることを疑う人はいるだろうか。
4. 後述の分析では後者は主語化される必要がない。
5. 因に、この種の構文はスペイン語のみに特殊なのではなく再帰受動が広範囲に使われるスラブ語の中でポーランド語にも見られる。次の文で動詞は3人称単数形でksiążkęは対格に置かれる。

Czyta się tę książkę. (Comrie 1975 : 113)

lee se este libro (acc) [西訳glossは出口]

6. この点に関する詳細は反論はGarcía (1976 : 367-75) に見られる。
7. 直接目的語を取る他動詞がそれを伴わないで現われる時、一般の自動詞と区別する特別な統語的手段を用いる例はトルコ語・ロシア語etc.に見られる。トルコ語では同根語が添えられる：

Babam, odasinda mektuplarini yaziyor.

Mi padre en su habitación sus cartas escribe

Babam, odasinda yazi yaziyor.

Mi padre en su habitación escribe

この他yemek yemek 'comer', dikiş dikmek 'coser', örgü örmek 'hacer punto de aguja'など。

(Lewis 1953 : 71, 西訳glossは出口)

ロシア語はある種の“understood transitivity”を再帰代名詞-sjaで示す：

Naša sobaka ne kusaetsja.

'Our dog doesn't bite'

Naša sobaka ne kusaet detej.

'Our dog doesn't bite children.' (Babby 1975 : 322)

Langacker & Munro (1975 : 803) によると、Huichol語(Uto-Azteca語族)にもunspecified objectを示す再帰代名詞の用法がみられるという。

8. 両タイプに統語的差異が全く存在しないとは言えない。この点はKnowles (1975)がsyntactic testsを用い、詳しく検討しているが、彼が指適する相違の多くは、実際は、seの外側にある統語構成素の対立に関するものである。従って後者のseに主語NPの資格を認める(?)彼の結論のevidenceとはなっていない。

9. ここで統語形式というのは、例えば「接語形」「再帰」「代名詞」「3人称」「複数」「文頭に立つ」「～の主語」「～に先行する」etc. 様々な統語上の特性を指す。意味と語彙形式・形態的形式との結合はここでは問題にしない。
10. Johnson (1976: 89)
11. 日本語の再帰形式「自分」は補文中でも主文に繰り上げられても表面に現われないことがある。ただしこの性質は再帰に限らずanaphora全般に見られる。
- *花子ハ花子 { ガ } 美人ダト思ッテイル。
花子ハ [自分ガ] 美人ダト思ッテイル。
 ク [自分ヲ] ク ク
12. この方式によれば levantar の非使役化を規定しなければならないなど若干難点がある。別の見方は出口 (1975: 70)。
13. Mata (1975: 30) のあげる例文はこの一例であろう：
Al verme derribado por el suelo, con todos mis huesos molidos, hice un supremo esfuerzo de voluntad, y como si tirara de mi propio cuerpo, me levanté a mí mismo.
14. 空白であることは語彙項目が挿入されていないことを意味し、主語のNP節点そのものは存在する。無主語の状態 (NP節点も失われている) とは区別される。
15. Cf. §5
16. El techo se llueve. のように‘雨漏りする’意では再帰形が出現する。
17. スペイン語ではNPを対格に表示するcase marking (与格と形態論上ほとんど同じだが主格と区別する) がある故、(22)が可能だが、前置詞 a その他の表層対格標識を持たぬポルトガル語ではこの種の文は成立しないと言われる。
(Schroten 1976: 142):
*Adora-se o herói.
18. 原 (1976: 63) によれば、各種のseに共通なのは“se”という形自体だけである。
19. 3人称の与格 (及び対格?) 代名詞の異形態であるいわゆる“spurious se”についても新しいアプローチの可能性が考えられる。le, lesがいきなりseに換えられるのではなく、1-1代名詞の非連続を要求する語彙選択上の制約のため、前者が空白となりRP挿入規則でseが入れられるとみなせばどうだろうか?
20. 小論と全く異なるアプローチであるがやはり一種のse統一仮説を展開するGarcía(1975)の野心的な大作には、この視点が欠落しているようである。
21. Bello (1958: 255) の示す例文 Se azotaron a los delincuentes も同類。
22. Cf. 出口(in prep.)

REFERENCES

- Babby, Leonard H. (1975): A transformational analysis of transitive -sja verbs in Russian. -Lingua 35, 297-332
- Babcock, Sandra S. (1970): The syntax of Spanish reflexive verbs. The Hague.
- Bello, Andrés and Rufino J. Cuervo (1958): Gramática de la lengua castellana. Buenos Aires.
- Comrie, Bernard (1975): The antiergative: Finland's answer to Basque. -CLS 11, 112-121
- Contreras, Heles (1974): Indeterminate-subject sentences in Spanish. IULC.
- 出口 厚実 (1972): SE受動文と再帰動詞のシンタクシス. -HISPANICA 16, 1-16
- (1973): 格文法とスペイン語再帰文の動作主格. -Estudios Hispánicos 3, 57-73
- (1975): SEはどこからくるか—スペイン語再帰動詞構文について. -HISPANICA 19, 70-84
- (in preparation): スペイン語における主語について.
- Foster, David W. (1970): A transformational analysis of Spanish se. -Linguistics 64, 10-25
- García, Erica C. (1975): The role of theory in linguistic analysis: The Spanish pronoun system. Amsterdam.
- (1976): The generative approach to the Spanish reflexive. -Romance Philology 30, 361-389
- Goldin, Mark G. (1968): Spanish case and function. Washington, D. C.
- Hadlich, Roger L. (1971): A transformational grammar of Spanish. Englewood Cliffs, N. J.
- 原 誠 (1975): スペイン語に主語はあるか? -HISPANICA 19, 85-97

- (1976): スペイン語のいわゆる“se”の諸用法の再検討から何を学ぶか。—東京外国語大学論集26, 35-64
- Johnson, David E. (1976): Toward a theory of relationally-based grammar. IULC.
- Knowles, John (1975): The Spanish impersonal se: two sources or one? -Language Sciences 35, 9-14
- Langacker, Ronald W. and Pamela Munro (1975): Passives and their meaning. -Language 51, 789-830
- Lewis, G. L. (1953): Turkish. New York.
- Mata, José (1975): Los reflexivos-intento de un nuevo acercamiento a sus usos, construcciones y sentidos. -HISPANICA 19, 25-57
- Moliner, María (1967): Diccionario de uso del español. Madrid.
- Oca, Esteban (1914): El pronombre se en nominativo. -Boletín de la Real Academia Española 1, 573-581
- Perlmutter, David M. (1971): Deep and surface structure constraints in syntax. New York.
- Roldán, Mercedes (1971): Spanish constructions with se. -Language Sciences 18, 15-29
- Schroten, Jan (1972): Concerning the deep structures of Spanish reflexive sentences. The Hague.
- (1976): Surface structure constraints on Portuguese pseudo-reflexive sentences. -Readings in Portuguese Linguistics. (ed) Jürgen Schmidt-Radefeldt., 139-155
- Suñer Beukenkamp, Margarita (1973): Non-paradigmatic se's in Spanish. Ph. D. dissertation, Indiana University.
- (1975): The free-ride principle and the so-called impersonal se. -1974 Colloquium on Spanish and Portuguese Linguistics. (eds) William G. Milan et al., 132-148
- (1976): Demythologizing the impersonal “se” in Spanish. -Hispania 59, 268-275
- 寺崎 英樹 (1974): スペイン語のいわゆる非人称および受動のse.—小樽商科大学「人文研究」47, 17-34
- (1976): スペイン語の非人称再帰文におけるseの機能. —小樽商科大学「人文研究」52, 167-184